

## 岩城光英の永田町だより vol.270

あと10日で新しい年を迎えることになってしまいました。忙しい師走、呉々もご自愛の上、お過ごし願います。

総選挙のため、1日号は休ませていただきましたので、今号が本年最後となります。

選挙期間中は、県内5選挙区をはじめ、北海道・大阪・愛知・埼玉の応援にも出向き、慌ただしい日々が続きました。その疲れも、開票の結果を見て、吹き飛んでしまいました。今回は、民主党政権に対する有権者の厳しい審判が下されたものです。

今度は、私達が与党となり、政権を担うこととなりますので、その責任は極めて大きいものがあります。ふるさとの復興を着実に進めるために懸命に取り組んでまいらなければなりません。

来週26日には特別国会が召集され、即日、首班指名により安倍総理が誕生いたします。被災地の復興をはじめ、現在我が国に課せられている多くの課題に対して、迅速に対応していくように、力強く支援してまいります。引き続きのご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

来る年が少しでも明るい年になりますよう、併せて、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

## 「勝って兜の」

北野湘南

衆院選挙は自民党294、民主57、維新54、公明31などとなり、連立を組む自民、公明で参院で法案が否決されても衆院で再可決可能な320を上回る325議席を確保した。マスコミの予想を大きく上回る地滑り的とも言える大勝利だ。安倍政権の経済対策への好感から株価は上昇し、円高から円安へと為替市場の潮の流れも変わった。国民の期待も高まる一方だ。だが、景気、外交、安全保障など難問は山積している。さらに参院は依然としてねじれたままだ。大勝利はしたが、本当の力量を試されるのはこれからで「勝って兜の緒を締めよ」というのが実情だ。

谷垣自民党総裁（当時）が、野田首相と会談し消費税の引き上げに賛成するが「近いうちに解散する」との約束を取り付けた後も野田首相は、解散の引き伸ばしを図った。その最大の理由は、選挙になったら民主党が致命的な敗退に追い込まれるとの極秘の調査資料があったからだ。その逆に自民党の勝利確実との調査資料を持っていた。だが、選挙突入の直前でも自民、公明の両党で過半数を握れるほどの勝利になるとの確信を持てるものではなかった。自民が第一党となり政権の座に戻るが、自民・公明に他の政党を入れないと過半数は握れないとの予測だった。

それどころか解散する3～4ヶ月前までの多くの世論調査では自民は200に達せず、180前後。公明も30程度。民主党は130程度となり、維新の会やみんなの党が大きく伸びて第三局を形勢すると予想されていた。どの党も過半数を握ることが出来ず第三局を入れた連立政権を組む以外に政治は動かなくなる。結果的には少数政党に過ぎ

ない第三局が政治の主導権を握るという構図が出来上がる。橋下・大阪市長が、今春から夏にかけて「我々が政権を握る」と豪語していたのは、こうした背景があったからだ。

この構図に大きな変化が生じた理由は数え切れないほどあるが、一言で言えば民主党が政権政党としての責任を全く果たせない無能な政党であることを国民の誰にもはっきりさせるようになったことだ。国が抱える借金は今年度末には1000兆円に達する。その一方、高齢化社会の到来で社会保障関係費は年間1兆円ずつ増加する。消費税の引き上げを図らなかつたら日本が第二のギリシャに転落することは目に見えている。自民が消費税の引き上げに賛成したのはこの為だが、民主は大混乱となり、小沢一郎元幹事長は自派の議員を率いて新党「生活第一」を結成した。それ以外にも離党者が相次ぎ、解散寸前には過半数すれすれにまで落ち込み、さらに離党者が出ると見られていた。国の将来よりも自分の選挙しか考えない政治家ならぬ「政治屋」集団に過ぎない政党であるという醜態をさらした。

中国は、尖閣諸島の領有権を主張するだけでなく中国の艦艇を日本の排他的水域に入り込むことが日常茶飯となったが、野田政権は「わが国の固有の領土であり、領有権問題は存在しない」の鸚鵡返しの発言に終始。激しい反日デモが吹き荒れて日本企業が放火・略奪されるどころか日本人が暴行を受けても対抗措置を取れない。東日本大震災の復興は遅れ、多くの人達が未だに非難生活を送っているが、遅れの原因が民主党内閣の不手際にあることもはっきりしている。「決められない、何も出来ない」民主党に対して安倍総裁は、震災復興を優先させ「外交と防衛を建て直し、日本国民の誰もが誇りの持てる国家とする」と、あるべき

国家の姿を明確に示した。最大の経済問題ではインフレ・ターゲットを設けてデフレ脱却を図るだけでなく必要な公共事業による景気拡大策も打ち出した。今の日本が最も苦しんでいる外交・防衛と景気浮揚策を明確にしたことから選挙戦に入ると自民党の支持率が上昇を続けるようになり、最終段階では殆どのマスコミが自民党による過半数は確実と予測し、その通りの歴史的な大勝利となった。

長年にわたって政界に強い影響力を持っていた小沢一郎氏が実質的に率いる「未来の党」は、僅か9人に止まる大敗となり、小沢氏の側近とされた議員の多くも落選し小沢氏の唱えていた「オリーブの樹」構想は、完璧に崩壊した。小沢氏の政治生命は、これによってほぼ終わったというのが永田町の一致した見方だ。小沢氏が政治の表面舞台で活躍することはもう無いだろう。「政権を握る」と豪語していた維新も53人に止まった。橋本市の発言から見たら半分どころか3分の1にも満たない。風が吹いたのは大阪周辺だけで全国的には微風に止まり、事実上の敗退だ。しかも、橋下氏と石原氏との政治的な思惑は異なっており、早くも「いずれ分裂」との噂が立っている。第三局が、政治的なキャスティングボードを握る可能性は少ないだろう。自民・公明の連立政権により思い切った政策が打ち出せる基盤が整ったことになる。

だが、参院では依然として自民・公明は少数与党だ。野党の協力を得なければ法案の多くは成立しない。真の政治力を発揮させるには来年夏の参院選で自民を勝利させる必要がある。その為には大幅な金融緩和や公共事業による景気浮揚。日米機軸同盟を再構築し中国、韓国等への毅然とした外交により国民の信頼を取り戻すことが必要だ。